

## A 班のまとめ

徳島大学 田村隆雄

皆、活発に発言し、学生、社会人、それぞれの立場から具体的な意見や感想を出せたこと、そして新たな発見や忘れていたことの思い出などが出来たことは良かったと思う。構造物の劣化、自然災害への対応について話題が集中した。ただサロンの本来の目的である、土木の将来像についてはあまり語り合うことができなかった。

原因は様々あると思われるが、常日頃にそのような事を考える機会があまりない事が大きいと思う。河川整備計画に見られるように 20 年先、30 年先を見通す力とあらゆる技術を活用する力は土木技術者にとって必要な素養だと思われるし、社会から求められている技術者だと思われる。人口減少や自然災害への対応など目先の課題は多いが、土木学会が中心となり、民・官・学だけでなく他分野の協力も得て、偉大な先人のように将来像を描けるような技術者を作り上げるシステムを作り上げることが、社会と土木の 100 年ビジョンではないかと思う。

## B 班のまとめ

愛媛大学 河合慶有

100 年前から継承されている「土木技術者の役割、姿勢」は 100 年後の土木の将来像においても不変である。経験から学び、さらに時代のニーズに応じて発展させる想像力豊かな人材は、産学連携、世代間の協働、またアジア共生などの多様性を通して育まれる。地域の人々が快適に暮らせる安全・安心な社会は、土木が直面するいかなる課題も技術の継承・革新を伴い克服する技術者によって支えられ持続されると期待される。

以下、交流サロンで出された意見の抜粋：

- ・土木のイメージアップ：女性を含めた幅広い世代の人材が土木工学を学び、土木系の仕事に従事する機会が増える。まちづくりなどソフト面では女性が活躍できる場は少なくない。そして、情報発信がより重要である。
- ・予算・人材の確保：限られた予算、高齢化する労働者、特に四国地方の建設現場では遠方より通勤している人員が多数であり人材確保が難しくなっている。外国人労働者を雇う例もあるが、技術継承の問題は顕在化してきている。
- ・グローバル化：海外と日本では文化・歴史的背景、また社会・経済環境が大きく異なり合意形成には価値観の差異を認識することが必要。幅広い見識のある人材を育成する必要がある。
- ・大学・地域企業の役割・連携：技術者教育は大学の座学のみならず、地域企業における

OJT やインターンシップを通して実施されることが効果的である、また海外における建設工事を担当したゼネコンの人材との交流はグローバル人材育成や技術移転・継承に大いに役立つものと期待される。

- ・100年後の四国における土木の将来像は、厳しさを増す自然環境や安全・安心を担う労働力人口の減少、技術力の世代間格差に疲弊している地域社会において容易に想像できるものではない。

## C 班のまとめ

香川大学 石塚正秀

25年先の土木の将来像については、つぎのような意見が出た。

- ・東南海地震への備え
- ・既存インフラの維持管理（昔は作ることが主体であった）
- ・少子高齢化
- ・東京の一極集中の加速。その結果、地方の過疎化がより深刻になる。

50年先の将来像となると、イメージができない状況であった。私もそうである。

時間 の関係で、100年先については、意見を聞くことができなかった。

私たちの役割については、つぎのような意見が出た。

・地域・市民の交流を進める。作らせてもらえないため、地元との合意形成がもっと必要である。

・学生は社会人に比べて時間の余裕があるので、学生が地域に入っていくように促す。

・想定外が起こることを認識しておくことが必要である。そして、それにどう対処するのが重要である。19年前に阪神大震災があり、高速道路が倒れた。また、2011年には、東北の震災も経験した。当時はその規格で大丈夫だったのに、構造物が壊れた。

・地域のために、役立つことをするという自覚が必要である。例えば、地方の衰退については、商店街もシャッター街になっているが、地方の活性化は、地方の人がやらないといけない。

・土木は、市民・国民のためにやる仕事である。

・土木だけではなく、他分野の理解が必要。

以上をまとめると、将来に必要なことは、「伝えること」という結論に至った。そのためには、情報技術を活用し、ネットワーク技術を土木分野に取り入れることが必要である。また、土木技術者と地域の人々との交流が重要である。

私の感想として、土木に対する今の若手技術者の考え方は、明らかに、20年前、50年前とは違ってきていると感じた。昔は作ることが主体であったが、これからは維持管理が主体であり、構造物を作ること自体に地元の抵抗がある。そのためには、地域の人たち

との交流が重要であるということを若手は認識していた。ハードの技術を維持しつつ、ソフト面の技術も求められることから、まさに、総合工学としての土木工学の重要性が増してくるのではないかと感じた。また、そのためには、国際的な視野も必要であり、土木技術者が社会から何を求められているのか、何を求めて行くのかについて認識の教育が必要と感じた。

#### D 班のまとめ

高知工科大学 五艘隆志

人口減少、技術革新、グローバル化など、社会が早いスピードで変化し、100年後を想像することが難しい状況です。現実的には途中で修正を重ねつつ進めることにはなりますが、目標がなければ修正の方向も見えません。100年後の目標は「夢」と換言してもよいと思いますが、悲観的になりがちな社会・経済情勢のもと、目先の課題対処に追われ、自分も含めて若い技術者が夢を持ち、語る機会が少なかったのではないかと思いなおす良い機会でした。